

子どもの「体育嫌い」の要因と傾向 —中学校段階に着目して—

大西文太郎 (兵庫教育大学)

I 背景及び目的

現行の平成20年の学習指導要領保健体育編の目標では、小学校、中学校ともに「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる」という表現があり、生涯スポーツ社会の実現を、学校においても重視している。橋本ほか(2013)は生涯スポーツにつなげていくためには、子どもにいわゆる「体育嫌い」の意識を持たせないことが重要であると述べている。体育嫌いは学年とともに増加する傾向にあり、中学校段階における増加は比較的多くなっている。橋本ほか(2013)の先行研究からも小学校時代、高等学校時代に対して中学校時代は体育に対して好意的な感情を持っていない割合が高いという結果が出ている。

生涯スポーツ社会実現のための1つの要因として、体育嫌いの子どもを減らすことが考えられる。そこで、本研究では、体育嫌いの子どもを減らすために体育嫌いが比較的多く増加する中学校段階に焦点を当て、子どもの立場から小学校と中学校の体育授業の感じ方の変化を調査し、その要因と傾向を明確にして改善策を考察する。

II 方法

はじめに、先行研究において「体育嫌い」「運動嫌い」の用語の使用は様々であり、一様ではないことから、本研究においては、「運動嫌い」を「体育嫌い」の要因のひとつだと位置づける。

兵庫教育大学の学生101名を対象にアンケート調査を実施。フェイスシート(学年・性別・小学生時の体育好き嫌い・中学生時の体育好き嫌い)と波多野ほか(1980)、加賀ほか(2006)の先行研究を参考に作成した仮説的構成概念(本人、授業、教師、仲間の要因)とそのカテゴリーにおける計73項目を、四件法を用いて回答を求めた。探索的因子分析(主因子法、バリマックス回転)を実施

し、因子負荷量.40以上に解釈可能性を検討した。 t 検定により性別、小学生時、中学生時の体育好き嫌いにおける平均値の比較を行った。

III 結果及び考察

因子を抽出したところ、質問項目のまとまりから5因子が最も妥当だと判断した。それぞれの因子を「体育へのネガティブ感情」「運動への足枷」「偏った指導法」「教師の閉鎖的な態度」「用具の整備」と命名した。

抽出された5因子の因子毎の平均値を求めた結果、「体育へのネガティブ感情」、「偏った指導法」、「教師の閉鎖的な態度」、「用具の整備」、「運動への足枷」の順で高値を示した。

性別間の比較では、「体育へのネガティブ感情」、「運動への足枷」、「偏った指導法」において、有意差が見られた。

小学生時の体育好き嫌いでは、「運動への足枷」において有意差が見られ、中学生時の体育好き嫌いでは、「体育へのネガティブ感情」、「運動への足枷」において有意差が見られた。

小学校と中学校の体育授業では、抽出された5因子に対し、子どもが嫌悪感を抱くような何らかの変化があったと考えられる。したがって、小学校と中学校の校種間で連携し、指導方法や授業内容を照らし合わせることで、子どもに与える変化を最小限にするとともに、発達段階に応じた体育授業をめざしていくことが重要だと考える。また、学校毎にどの要因に体育嫌いが多く存在しているかを把握することが重要な課題だ。

また、異なる調査対象や調査内容を検討、比較することで、より明確に体育嫌いを減らし、体育好きを増やすための要因を示すことができると考える。